

2021年3月15日

意外に可能

学問の本質の論

縄文
JOMONあかでみい校長 山田 学^{まなぶ} ©

※本論は、2015年3月16日に公開した、〈学問本質論〉を、
改題し、更新しました。

学問の本質の日本語は、旧かな表記が、ふさはしい。
その考へから、さう、させていただきました。

もともとは、アフリカ大陸のみにあつたとされる、人間 (ホモ・サピエンス)。われらが、地球の諸域に、対応ないし適応しつつ、諸民族に分化し、闘争してきた、少しは、調和もしてきた、伝統。この伝統における、認識理の必然と、生理の必然と、物理の必然、これらを、冷徹に、理解していく。さういふ、民族地理学の本質論を、発達させつつ、まともな、諸民族調和への道を、創造していく。さう、ありがたいものです。

民族闘争のための組織、でもあつた、国家。それとの連関においては、アジア的→古典古代的→中世的→近代的といふ、世界史的国家、それらが、それぞれ、地球の特定領域にて登場した、必然。これも、解明していきたいです。

さらに、眞智、すなはち、健康平和な、現実の認識、にての、学問の本質の論、これは、可能です。日本社会の民間からこそ、可能です。日本民衆が、素朴だからです。

眞智、健康平和な、現実の認識、にての、学問の本質の論は、可能である。この確信が弱いからこそ、人間社会の諸権威や諸権力の現状は、教育力ではなく、資金力や武力に、頼りすぎる。そして、人間社会総体を、漂流させてゐる。悟りが無い…

世界は、その本質も、一面ではありません。いくつもの面があります。世界の、本質的な、全面。それらへ、着目していく。すると、世界は〈本質的な諸面の变化〉として、認識されます。变化する対象において、ある、〈矛盾する論理〉として、世界の本質的な諸面は、理解されていきつつ、世界の本質的な全面は、理解されます。〈矛盾する論理〉とは、「何かである、とともに、それでない。」です。変化の論理です。

しかし、「対象において、〈矛盾する論理〉はない。」と、考へる。なら、变化する対象を、理解できず、無变化の対象をしか、理解できません。ので、世界の〈本質的な諸面の变化〉を、理解できず、結果、世界のどれか「本質的な

一面」に、とらはれます。誠に哀しいかな、実は、20世紀以降の思想の諸権威が、すべて、かうなのです。これは、思想の立場に、よりません。つまり、〈群盲象を撫づ〉の状態です。かうして、眞智、健康平和な、現実の認識、にての、学問の本質の論の可能性、これが、見失はれてあります。

わたしどもが、今までに、思索してきた、すなはち、矛盾の解決をしてきた、〈対立の統一〉ないし〈区別と連関〉の諸項目を、以下に、綴ります。これらの思索は、ほとんど、JOMONあかでみいサイトの、さまざまな記録内容のなかに、あります。本質論は、むろん、抽象論であり、具体論については、それら、さまざまな記録内容のほうを、ご覧ください。

世界の本質、あるいは、世界の諸分野の本質には、以下の、〈対立の統一〉ないし〈区別と連関〉が、ある。(世界の本質の論が、世界学本質論。世界の諸分野の本質の論が、科学本質論。前者と後者を合せ、学問の本質の論。)
〈世界の本質〉

世界は〈主体と客体〉である。世界は〈体内と体外と認識したい〉である。体内が、主体であり、体外と認識したいが、客体である。世界は、体内の動的存在と、体内の静的存在と、関係と、動的属性と、静的属性と、実体、である。体内の動的存在と、体内の静的存在が、主体であり、関係と、動的属性と、静的属性と、実体が、客体、すなはち体外と認識したい、である。

世界はまた、生活と生産と自然と宇宙、である。

世界には、架空の世界と、現実の世界とが、ある。世界には、未知の部分と、既知の部分とが、ある。世界は、時間と空間の統一、である。時間の過去と未来、について、未知の部分と、既知の部分とが、ある。空間の壮大と微細、について、未知の部分と、既知の部分とが、ある。世界には、歴史があり、部分として、過程があり、部分として、運動がある。世界の歴史は、すなはち、進化と発達である。進化と発達には、流転と集結がある。地球外主体と人間社会の問題、もある。

世界は、あるいは、世界の諸分野は、本質と構造と現象の統一、である。世界には、類と部分と個が、ある。類には、普遍性があり、部分には、特殊性と普遍面があり、個には、個性と特殊面と普遍面がある。

世界の関係には、矛盾する論理と、絶対の論理とが、ある。矛盾の解決には、調和と闘争がある。あるものの変化に、対立するものが、媒介する。あるものから対立するものへ、対立するものからもとのあるものへ、否定の否定、といふ変化がある。あるものが、直接に、対立するものである、といふことがある。

世界の部分に、質と量とかずと図形がある。量とかずと図形において、執着無限と、実用無限とがある。あるものと対立するものは、質と量において、浸透と転化がある。ものごとには、内容と形式がある。あるものから対立するものへ、内容と形式において、止揚がある。

世界は、現象において、偶然と意志があり、本質において、必然がある。世界には、主体的から客体的へ、道徳と経営と公会発達と認識理と生理と物理、といふ分野がある。主体すなはち体内にもとづき、病的戦争と健康平和がある。眞智、健康平和な、現実の認識、にての、保育と教育と保健（の運営と指導）と看護と医療が、理想である。諸民族の伝統には、必然があり、諸民族の調和へ創造する意志が、理想である。個人には、受精と生誕から死亡までの、物理と生理と認識理が、ある。

〈道徳の本質〉

人民が、認識と表現と労働と生産と休養、これらを、未来協同へ統一していく。その平等が、ある。眞智、健康平和な、現実の認識、にての、労働力の養成と使用。これに、世界対応の自由の拡張が、ある。労働力は、学問と技能と規律と体力である。労働と修正と休養において、姿勢動作と呼吸と意識を、工夫する。技能には、創出と保持と使用が、ある。認識と生体に、技能があり、労働手段と休養手段に、技術がある。健康平和な、姿勢動作と、呼吸と、食事（と排泄）と、人間関係（とくに異性関係）と、精神と、生活環境を、追究しあひつづける。健康平和研究の冥想生活。これが、保健であり、冥想生活において、道徳を発達させる。道徳といふ生活規範は、個々人に属し、道徳共同体の運営や指導は、道徳案のみである。個人の体内を、人間社会発達、ないし世界進化と、つなぐ、冥想をする。

〈経営の本質〉

呪術と宗教と哲学と科学と政治、これらの伝統こそを、止揚し、眞智、健康平和な、現実の認識こそを、生産しあふ。現場の渾沌とした情報に、もとづき、秩序ある予想を、しあふ。記録と記憶と注意と発想と会議、これらを連関させる。予想を、実験と運営と経営により、確認しあふ。資産と収支と負債を、反省する。生産前提と労働力を組みあはせ、生産する。生産前提は、労働対象と労働手段である。労働力は、休養手段と、保育と教育と保健と看護と医療により、養成する。仕入と生産と陳列と販促と健康平和研究、これらの最高品質と最低費用を、追求する。商品の魅力と、陳列管理のわかりやすさを、追求する。提案と通信と金融と運輸と建築を、健康平和化する。資産増殖目的から、未来協同目的へ、再編しあふ。食糧と資源とエネルギーと通貨の需給を、健康平和化する。労働と貨幣の関係、認識と言語の関係を、

正しく、理解しあふ。

〈公会発達の本質〉

人間は、世界を認識し、表現ないし言語し記号しあつてゐる。機能言語学より、内容言語学を、発達させる。生活は、労働と生産と休養である。眞智、健康平和な、現実の認識、にての、規範と学問と祈りと芸術と養生、つまり、善と眞と信と美と健を、発達させる。公会創造には、学問(思考)と、生産(生体)と、道徳(情感)と、民衆批評(情念)と、政治解消(情念)、といふ分野がある。公会創造は、思索と情念の先導と、批評と反発の自由、である。公会創造は、指導と運営を、させていただく。指導部と運営部は、民衆に、育てていただく。未来協同へ、規範と、概念を、統一していきあふ。未来協同には、公会と協会と個人とが、ある。家庭と同好会と職場といふ、私的な協会がある。公会創造の意志は、生産発達の必然に、対応する。諸民族の闘争から調和へ、追求しあふ。階級(資産格差)の闘争から、循環へ、追求しあふ。労働力(といふ商品)と、通常商品と、貨幣(といふ商品)の、存在と要望を、調整しあふ。人間社会の健康平和化のための、立法と執行と司法と世論ないし選挙、を、考へる。すなはち、政治形態と統治形態と国家形態を、考へる。軍事産業から、健康平和事業へ、追求しあふ。

〈認識理の本質〉

認識には、感覚と表象と概念がある。目的と意志と規範も、ある。規範には、言語規範・記号規範と、道徳と、組織規範と、法律と、条約がある。認識する自分には、生体自分と、脱生体自分とが、ある。認識には、眞理と誤謬がある。眞理には、相対的眞理と、絶対的眞理とがある。概念は、概念と判断と推論へ、展開される。原子ないし素粒子といふ概念と、もののあはれ・雪月花・花鳥風月といふ表象と、酵素活性場の予感を、調和させていく。

〈生理の本質〉

主体の陰陽と、客体の陰性陽性といふ、生理反応としての世界観が、ある。客体的と主体的の統一として、神経的認識と、血液的労働が、ある。文学の主題として、愛と死がある。生命は、生命体といふ主体における、代謝過程である。遺伝模様は、生存環境に適応する形態において、代謝過程に反映する。生命体を構成してゐる物質は、交替してゐる、とともに、生命体の構造・機能は、一定期間、保持されてゐる。物質には、生命促進性といふ物性がある。

〈物理の本質〉

物体運動は、今、ここに、有る、とともに、無い、である。空間の全位置に、場といふ性質があり、空間の位置には、眞空位置と、物質存在位置とが、

ある。「遠隔力」より、場の論理を、深める。場は、空間の各位置における、加速度の可能性と現実性、である。力学から電磁気学を、解釈するのではなく、電磁気学の延長から、力学を止揚する。物質には、弾性と塑性と粘性と分離性の総合がある。「エネルギー保存則」といふよりは、物質的運動における、転化比例法則である。

世界、あるいは、世界の諸分野について、本質と構造と現象を理解していく、認識方法は、かうです。

あらゆる現象の奥にある本質を、予観する。その本質予観と、すべての現象確認が、調和するやう、構造の諸面を、仮説していく。すべての現象確認と、調和するやう、構造諸面仮説と、本質予観を、しだいに、修正していく。現象確認そのものが、困難な場合もあるが、ともかく、現象確認と構造諸面仮説と本質予観が、調和するやう、修正していく。すべての現象確認と構造全面仮説と本質予観が、論理的に、調和したと、納得できた場合は、仮説や予観も確認となり、本質と構造と現象を理解できた、といふことになる。

この認識方法こそが、人間社会の未来協同へ、思考統合の面にて、学問発達体を組織していく、協同認識方法でもあります。〈諸個人の学問の、その時点での記述と、それを反省しあつての、協同思索のくりかへし〉といふ方法の洗練も、必要です。

(お断り) 文中、〈眞智〉は、沖 正弘師 (1919~1985) の、用語を、山田 学なりの、意味あひにて、用ゐらせていただいてをります。